

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

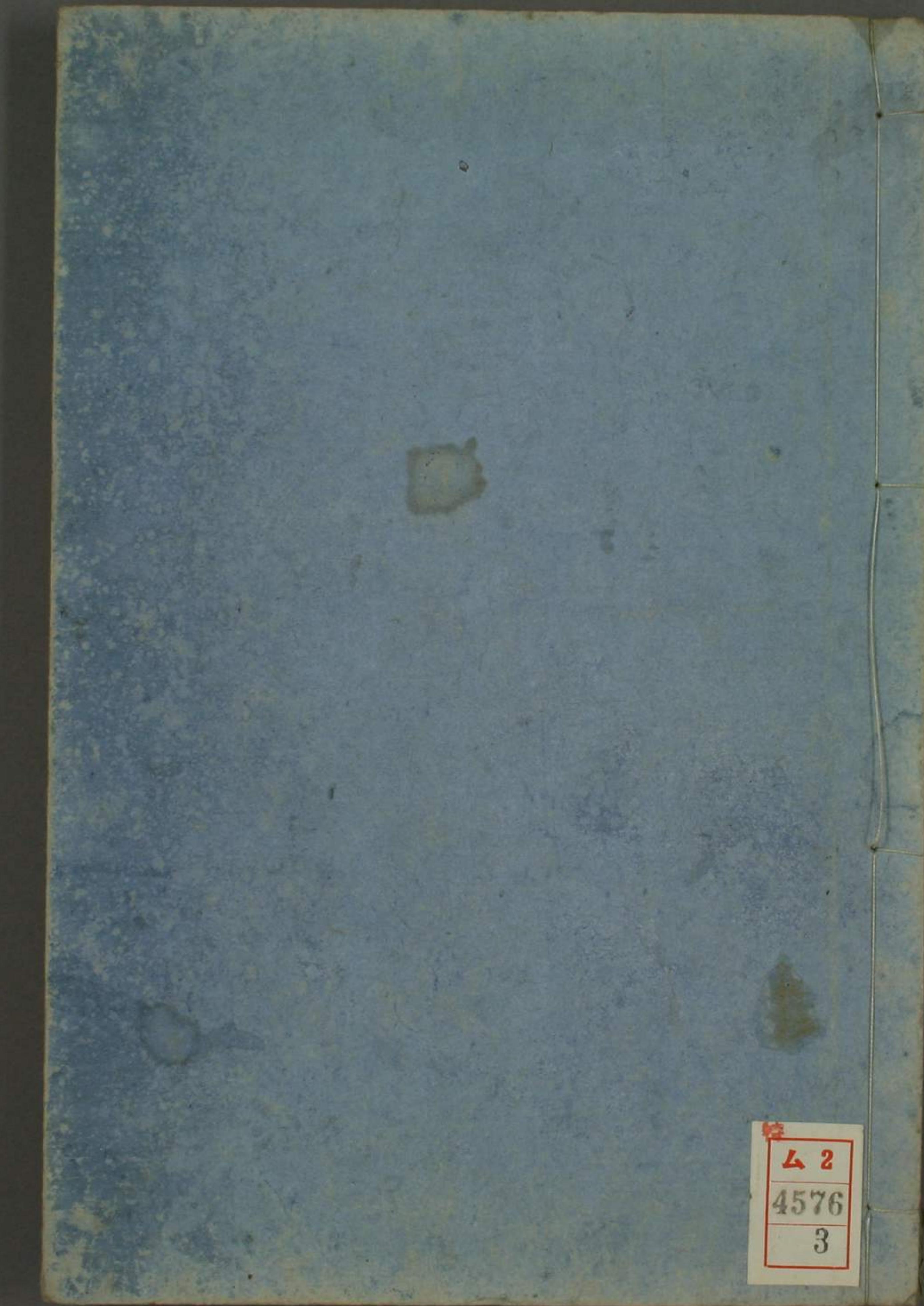
KODAK

LICENSED PRODUCT

Black

3/Color

White



水蒸船說略拾遺



ム2
4576
3

水蒸船說略拾遺

逢谷箕作阮甫慶儒翻

水蒸儀 欽而覃 四デルニアアデーリグニ百二十一葉

一百七十五章 水蒸儀ニ二種アリ其運動差、候謬
易ク精微ナルト能ハス其一ハ平常水銀製水蒸儀十
リ水銀柱ノ高サヲ見テ水蒸ノ翕張濛氣輪ノ體斧ニ越
越スル若干度ナルヲ見ハス其二ハ大氣水蒸儀トシナリ
全水蒸ノ翕張ヲ知ルニ大氣ノ分量ノ體斧セラヒ度ヲ
以テス而テ其大氣ハ口ヲ封シタル管内ニ盛レリ但此第

昭和二十九年
十月三九日

甚々

二種ノ者ハ水蒸翕張高ク尋常水蒸儀ヲ備ヘ設ケル
ニハ其地狹隘ナル寸ノミ此種ヲ行フ若夫軒壓水蒸ノ
翕張ハ亦水柱ノ高サノ所在ヲ察シテコレヲ測算スルヲ罐
内ノ水ノ多少ヲ測定スル法ノ如シ或ハ直算セル筒内ノ
水ノ所在ノ高低ヲ以テ前リニ記セル説ト參攷スヘシ
之ヲ知ルコアリ但シ滾沸シテ冲升セル管内ノ水ノ高サヲ
以テ水蒸ノ翕張ヲ察スルハ固ヨリ能ハサル道理ナリ
重壓水蒸ノ翕張ノ若干タル太略ヲ通曉セントスルニ
ハ小ナル避害古ラ以テ水蒸儀ト為シ用フルモ亦可ナ
リ。四十六岡四十七岡参考スニ若夫レ斐條天平

第五版

管

ハヘルバノ一種或ハ銅横杆コ-ペルノ張斐カシ用テ一分
ノ弓弯上ノ斐條ニ合シテ其運動ヲ起サシムル者モ亦同
ク水蒸ノ翕張ヲ測量スルニ足レリ但シ此ニ法ハ其運
動精密ナルコ稀ニシテ多クハ校實ナラス

水蒸儀ハ地所ニ隨七罐子ノ形模ニ由リ用ヒント欲スル
目的ニ應シテ或ハ罐子上ニ之ヲ設施シ或ハ水蒸コレ
ヲ造就シテ可ナリ若シ罐子ト機盤トノ間甚タ隔奢
シ或ハ機器ノ位置ヲ設ケル丁異様ニメ或ハ異状ノ形アモ
ノ如キハ罐子ニモ水蒸管ミ規筒ノ衣套ニモ共
ニ水蒸儀ヲ造リ添フルコアリ凡ソ水蒸儀ヲ設置ス

ル地ハ器司ストニ煥者ケル一共ニ觀覽考索スルニ便宜ナル所在ヲ擇フヲ好トス

尋常水蒸儀ハ勾居ニテ因距ニシテニ為セルニ股ヲ為セル管ナリ其一股ハ罐子ノ水蒸空若クハ水蒸管若クハ規筒ト其衣套ベニシトシトノ兩間ニ通ス若夫他ノ一股ハ其管口開啓シ蒙氣輪大氣ヲ自由ニ通輸ス管ヲ玻璃ニ造ルハ其徑小ノ者ヲ用フル寸ミナリ或ハ鑄鉄或ニ鐵ヲ用フ但シ鍛鉄ノ者最常用スル所ニ屬ス銅ニ造ル者ハ溫煖ナル水銀ノ力能ニ由テ自ラ銷鎔セラル管ノ兩股内ニハ水銀一升一降ス此兩股ノ孔径ハ濶窄ノ

不同ナク盡ク同寸タルヲ必要トス

鍛管ハ其中心ヲ鑽開スル後第二百三十回ニ寫セル形狀ニ勾居スヘシ其後一股ノ端ヲ罐子又ハ水蒸管等ニ造レ同ニ大サノ孔ニ螺鎖シ或ハ此管ヲ合スル為ニ設タルA号圓釦ニ螺合ス水蒸ヲ承ケル一股ハ鑄鐵ト鍛鐵トラ論セス第二百三十一回アノ号短小完屈セル小管ノ内若クハ其外圍ニ螺定ス此小管ハ更ニ罐子若クハ水蒸管ト聯合セリ太氏水蒸儀ト罐子トノ聯綴ハ此クノ如シ然トモ其短管ハ簡省ノ為ニ半規ノ形ヲ為シニ第二百三十二回參攷スヘシ其ニ翼ア号及セノ号ヲ具ヘ之シテ

罐子或ハ水蒸管等ニ螺合ス

水銀ノ上面木片フロツラ泛フ或ハ鐵片フロツラ用フ六
殊ニ好シ其輕壓水蒸ヲ測量スル水蒸儀ニハ木蓋等
C d号(二百三十二圖)ヲ付ク此蓋ハ銅釦A B号ヲ參
セル者ニ向テ水銀升降ノ度ヲ顯ハスナリ此銅釦ハ下
身A号ノ評ニ於テ口ヲ開タル一圓盒ボレーネラト合シ水
蒸儀ノ上行股A C号ノ頭ニ螺合シテ銅釦ト水蒸儀
トヲ聯ヌ木莖ヲ自在ニ升降セシムル為ニ二眼e fニ有
ノ中ニ貫テ之ヲ支フルモ亦無用ニ屬セサルベシ但シ
此製ノ者ハ其莖ヲ尋常ノ者ヨリモ長クナスヘ木

若クハ鐵片フロツ降テ鼻下ノ地ニ在ル寸ニ方テ木莖ノ
管外ニ挺出シ露ハル所、在ハ公割セル度釦ノ零度_處ヨ
リ上際ニ至ルマテ盡候黑色ニ染ム其零度ニ當ル所ハ
明白ナル記ヲ為シ或ハ記識ノ隆乳_{スナ}トヲ造リテ水銀ノ
位地ヲ經験シテ寢ヲ生セサルヤウニ為シテ可ナリ
重壓水蒸ノ水蒸儀ニ備裝スル木鐵泛片フロツハ之ヲ
急ニ繫キ其体木若鉄泛片ヨリモ軽キ者ヲ繫ク木鐵
泛片升降スルニ隨テ錨モ亦升降ス其升降ハ必テス

木板B C 号即千度表傍ニ循行ス板面ニハ水蒸翕張多
少ヲ測量スル度ヲ劃ス道下小輪ヲ設クル水蒸儀上
行股ノ全設施ハ銓氣管バソノ如ク玻璃格。ラ合タ朱
画ヲ以テ範住スヘシ

又某製水蒸儀ノ下行股内水銀天然ノ水平按ニ
ノ水銀水平ヲカナヲ為セル上際ニ於テ或ハム小ナル平直ノ
上下均等スル者ヨリアラツカニ止ムル寸ハ隨テ
塞子カラツ設ル者アリ炭火ヲ焚蒸スルヲ止ムル寸ハ隨テ
此塞子ヲ刺シ塞キ按ニ画抜シテ其
管ヲ塞クシテ水蒸ヲ避害舌ヨリ洩シ
去リ水蒸翕張大ニ減少スル向水銀ノ水蒸罐内ニ
擯入スルヲ防ク又罐子上ニ大気舌リムツカヲ造設サ

ル者ハ此裝置ヲ行テ尤好シ

管官ノ納往ハ涅弟耳蘭土法三ドイム半ヨリモ濶カル
可カラズ水蒸輕盈ニシテ譬ハ蒙氣壓筈二超ル丁ミ
分一アトモス柱ヘルノ翕張十寸ハ水蒸其儀品ノ上行
股内ニ水銀ヲ推升シテ二十五ドイムノ高サト為スヲ要
スベシ此際下行股内ノ水銀全面ハ管下ノ曲處ヲ距ル
丁猶十分ニ遠ク又上行股内ノ水銀モ其股ノ上端マテ
上升シ行カス尚餘地アルヲ好トス故ニ水銀柱ノ高サノト比均セ
上際更ニ猶ニ掌ハアルヲ其通法ト為スヘシ若夫重
壁ノ水蒸ヲ測ル为ニ製瓦水蒸儀ハ其上行股ノ長サ水

蒸ノ體^ス竹數倍アトモスヘルノカ勢^ス以テ動運スレハ猶
餘長アルダケノ長サニシテ體^ス七十六ド^ムラ備ヘ更ニ
此長サノ外餘長アルト猶四パルムヨリセハルムニ至リ體^ス
更ニ猶盛ナルノ不虞ニ備フベシ其下行股ハ上行股ノ長
サノ三分ノヨリモ長キヲ好トス但シ其股ノ短縮ナル者
ハ要スルニ奸議ニ非サルナリ

水蒸儀ノ度表ヲ分ツニ涅弟耳蘭土法ノド^ムラ用ヒ
ント欲セハ木莖^ステル毎一ド^ムラ升レハ水銀柱乃チ
升ルト涅弟耳蘭土法ノニド^ムトナルナリ其故ハ
水銀上行股ニ在テ升ルコ一ド^ム十九寸ハ下行股内ニ

在テ其降ルト一ド^ムニシテ其ニ上面ノ差每必ニ
ド^ムタルヲ以テリ水銀柱^シセ十六ド^ムラ中等ノ
高ヤニメ濛氣輪體^ス竹ト相比均スト為シ此^シ柱八方
ド^ムノ地ヲ一ボント零^クニス三ロード三シキリニヘル^ス重
サ^ス以テ體^ス竹スト為スオハ木莖升ルコ一ド^ム每永
蒸ノ體^ス竹増ス丁^ノアトモスヘル^ス即千方百一ド^ムノ
地ヲ^シロードセニノ體^ス竹増ス十^シ輕體^スノ水蒸ヲ測量
スルニハ涅弟耳蘭土法十五ド^ムノ度表ヲ用テ足レリ
輕體^ス水蒸ノ者ニ其度表ヲ分劃シテ毎分劃ハ方一
ド^ムノ地ヲ^シロードボント即チ一ラシスノ體^ス竹増加スル

者ト相符スルヤウニ造ルベシ英吉利尺度ハ涅弟耳蘭
土ニ在テ之ヲ循用スルハ宜キ所ニアラストニヒ涅弟法
ニ従テ分劃セント欲ル者ハ涅弟法三十八ストレーパ
ノ長ト為スラ要スベシ度表ハコレラ四分シテ足レリ其
毎分ヲ平分シテニト為シテ半キシスラ顯示スヘシ第

二百三十四國參攷スヘシ

重體水蒸ノ為ニ設クル水蒸儀ノ度表ハ其アトモスヘ
ルヲ分ツニハ三十八ドライムツニ分ツ後更ニ毎分
ニリニスノ區別ヲ劃ス即チ全アトモスヘルヲ半分シ而
テ又四分アトモスヘルニ分ツヘシ

水蒸其儀内ノ水銀上ヲ體筈スル寸下行股内ニ行到リ
冷ニ遇テ稍凝ニテ又水ニ化ニ水銀今ハ水柱ヲ以テ體筈
セラレ而シテ其在ル所ノ位ハ水蒸ノ體筈ノミノ者ヨリモ
却テ高ク體言ハ水柱十三ドライムツ^洋高サラ為ス寸水蒸體
筈ヨリモ高キコ一ドライナルカ知シ術者宜ク此景色ヲ
觀テ度表ノ分劃ニ意思ヲ覃フル要スヘシ而テ
水蒸儀ニ水銀ヲ充ツルカ如ク下行股ニ水ヲ充テ木革
ノ末端若クハニニノ識記ノ所在ヲ以テ度表ノ零點ト符
合セシメテ後其上際ノ區別ヲ度表ニ分劃シテ数々至細
密ラ致スコアリ

一百七十六章 通常ノ水蒸儀ハ其水銀管内偏角
口往タルヲ必要トス別語ニテ云ヘハ管心ノ洞サ同一大サ
為スラニフ此一事ハ此儀ヲ造就スル間ニ在一艱難ノ品
件タリ若シ其管大ニ長カレベカラス且一ニノ管ヲ螺旋線
スルテ鎖合スルヲ要スヘキ者在テ、珠ニ二層ノ艱苦ヲ加
フ若シ此器ノ造製ヲ變シテ其水銀水平下行股内ニ在テ
甚ダシク低下セサラシタル寸ハ上ニミヘル一難事ヲ省キ去
リヲ得ヘシ此ノ如キ製ヲ成サント欲ル者ハ諸種ノ銓
氣管バズノ製表ノ如ク水銀槽ガラスニシク水銀ノ度ヲ
保スル者ニ擬シ造ルヘシ某氏力造レル者ノ如ク下行股入

B第二百三十五圖ニ球狀水銀槽ヲ具ヘ其洞サハ巨
号上行股内ニ水銀柱極テ高ク上升スルカ故ニ下行股
ノ水銀ノ度上ニミヘル如ク低下ヲ受ケシテ其造法差
簡易ナリトス而テ此製作ノ者同ノ潤サヲ為シテ鑽穿
スルヲ須フルトナシ此ニミヘル些子ノ水銀低下十レ度表シ
分劃スルニ於テ其算計ヲ為シ得ヘキニ足レリ但シ重體
水蒸ヲ測量スルニ此製ヲ用アルニハ其管極テ長カラサ
ベカラズ此製ニ在テ皆水銀上面ニ積聚セル水ノ體矣
ノ幾何タルヲ算計スルヲ要スヘシ
又文水蒸儀ノ別製ニメ他種ニ超テ數項ノ本利アリ者

ヲ記載セントス其第一利ハ水銀尺度ノ變化也子ノ微少變化ヲ受ク其第二利ハ水銀罐子或ハ水蒸管内ニ驅出セテルミナシ其第三利ハ水（但シ至微少ノ量ニ論ナク）水銀ノ上面ニ積聚スル患アルコナク若夫其水銀ヲ納ルニ管ハ齊ニ因一ノ閥サヲ保ツラ要スルコナシ但シ此製ノ器ヲ備ヘントナラハ其十分適功ナル高サノ地ヲ挾テコレヲ設クヘシ此水蒸儀ノ水銀槽ハ鑄鉄ニ造レル方形ノ槽ナリ（第二百三十六圖）直截平面ノ形ヲ參攷スベシ A B C D 号ヲ記トス此槽ハ螺旋釘シ以テ廻ゲル E F 号ヲ貫キ透シ罐子ノ傍若久ハ上際或ハ水蒸管

ニコレヲ鎖合ス此槽ノ内中ニ G 号管アリ管ニ短細管 H 号ヲ螺合ス此短細管ハ直ニ罐子或ハ水蒸管ノ水蒸空ト通ス其水銀ハ槽内ニ在テ H 号管ノ墮板ノ稍下ニ位シ水水銀ノ上面ニ著シ積聚スル丁能ハナルタケハ水蒸モ水銀ヲ壓管セサヌシムヘシ水銀管 I K 号ハ C 口号蓋釦スニ穿テル一孔ニ貫キ下ル其孔ヨリ水蒸ノ洩出ヲ防クカ為ニ麻絮盒 I M 号ヲ設ク水銀管ハ K 号ノ部位ニ於テ水銀槽底ニ安托シ其部ノ周圍ニ二個以上數個ノ頗ル大孔ヲ穿千此孔ヲ以テ水銀槽ト氣息ヲ通ス水銀管ノ内径ト水銀其管心ニ上升スル高哉

何度タル可キヲ測定シ得ルコアテハ水銀槽ノ水銀ノ面
三ストレープヨリ五ストレープニ至ルヨリモ大ナル低下ヲ生サ
ルタケニ其槽ノ大サヲ測定スルト固ヨリ甚タ難カラサル
ベシ

上ニ举タル諸種水蒸儀ノ内ノ一ヲ用ヒ若クハ同一種形狀
ノ水蒸儀ヲ用ヒテ之ヲ至重體ノ水蒸翕張ヲ測ルニ從
之用シト欲スル寸ハ其管必ラス太ニ長カラサル可カラス
若シ是ノ如ク傾長ナル管ヲ設ク可キ好地ヲ得ルトナク
或ハ其地ノ景色ニ由テ平常ノ水蒸儀ヲ設施スル丁
極テ僅啓ニメ為シ難キ勢アル者ハ別種水蒸儀ノ

常彈力アル流体ノ體笨ノ制度ニ本ツキタル功績_牛
ノ及セ設施ヲ用フ機_ハ體笨ノカ濛氣輪大氣ノ翕張
ニ及_セ對セル状ヲセル者ヲ用フルシテフ卷三第二篇二
章十七條参考スヘシ

第二百三十七圖 A B C D 号ハ宛屈セル玻璃管す
A号ノ許ハ水蒸罐或ハ水蒸管ト通ス D号端ハ
{管内}{EC}_{マテ}_{水銀}_内_後
大氣ヲ納レサルヤウニ其口ヲ焼キ閉ツヘシ下行股ニE
号ノ一球アリ水銀槽トナリテ水銀測柱ヲシテ務テ少シ
ク變化セシムル為ニス之レカ為ニ造レルE球ハB C D管ト
比例シテ相應ノ滴サアリテ水銀ヲ貯フルヲ要スベシ但

シ B C D 管ハ其内徑五ストレーピノ滴サアルラ十分
ナミ C 号ノ地ヨリ D 号端ニ至ルマテハ涅弟法ノ一エルニ
過ルコト須ヒサルカ故ニ E 球ノ大サ B C D 管ノ大サト比
例シテ其宜キヲ得ルハ甚タ為シ易シトス上行股 C 号
ヨリ D 号ニ至ルマテ濛氣輪大氣ヲ充實ス此股ハ務メ
テ正圓ナルヲ要スベシ細繩スレハ其管徧ク同一ノ滴タル
ヘキヲ云フ今ハ水蒸 E 号水銀ラ壓管ニ水銀上行股
内 C 号ニ於テ其度目ノ地ニ升ル時、水蒸翕張アト
モスヘルヲ為ス者トス上行スル水銀ハ水蒸ノ翕張ニ
メ進退上下スル丁恰モ稱鑄ノ物ノ輕重ヲ權スルカ如ク十

ルノ道理ヲ考索セスシハ若シ水蒸ノ翕張ニアトモスヘ
ルトナルニ至ラハ大氣壓管セラレテ C D 号ノ長サノ
半截ノ地ヲ占ムヘク又水蒸ノ翕張増シテ三四五アトモ
スヘル等マテニ升ルコアラハ C D 号ノ長サノ三分ノ
一四分ノ五分ノ一等マテ大氣シ壓管スヘシ(卷三第二
篇第二節オードスキテ)第二章十七款比考スヘシ)玻璃管ノ
後ニ置キタル度表ノ區別ハ此法ニ据ル寸ハコト造リ出
ス丁甚タ易ク管ノ上行股長ヲ加フルニ随テ其區別モ
愈く長ク更ニ細別ヲ圖矣スヘキニ至ル但シ天球ノ水銀測
表ノ C 号上ニ立在スル水銀柱ハ水蒸ニ保テ其地位
有

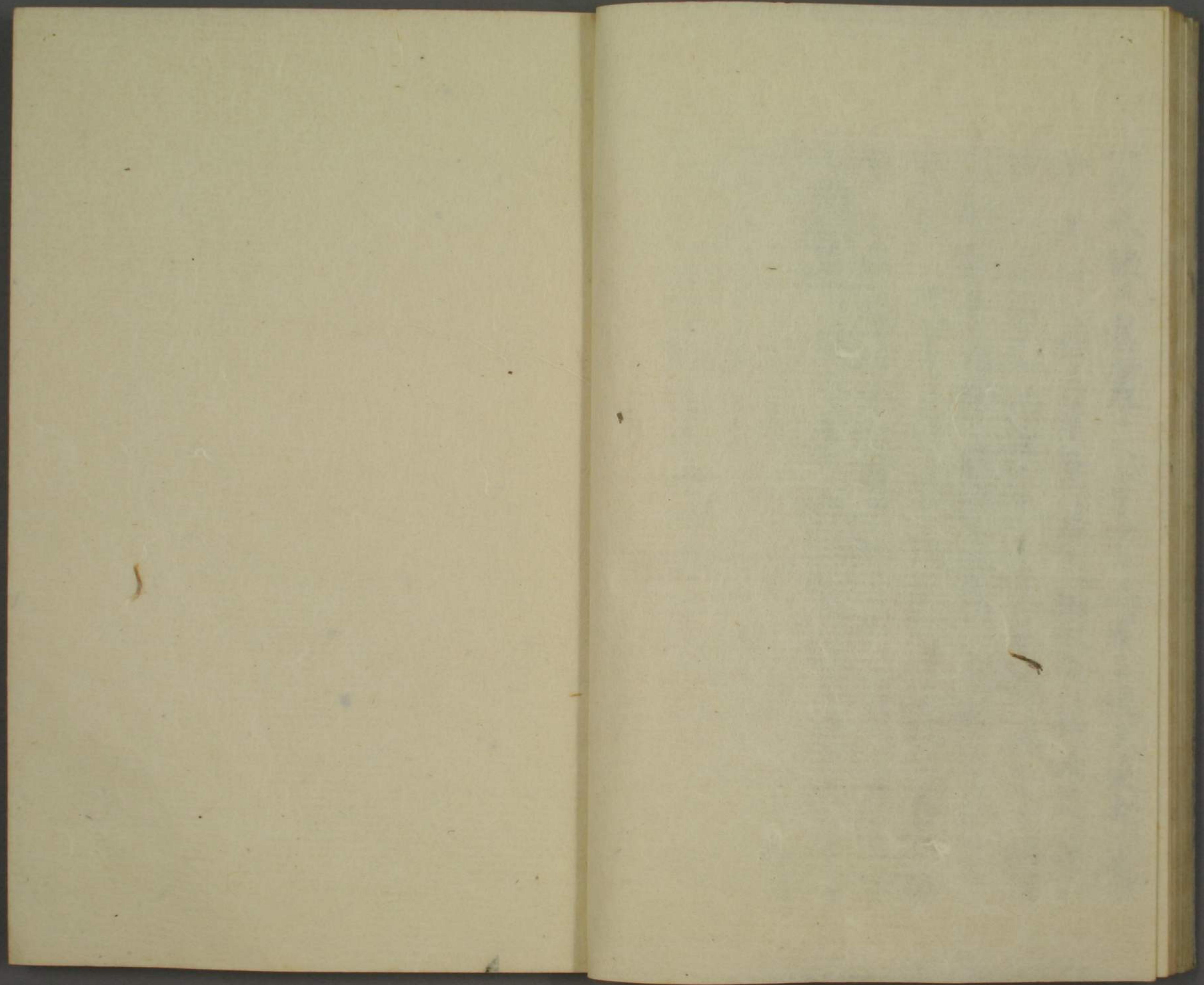
ニ在ラシムベシ故ニ度表ノ區別ヲ為スト差、難クシテ
C号ノ一點ノ地ヨリニ三以上數アトモスヘル、區別ノ各
個距離ハ算測ヲ用フルニ非サレハ定メ得ヘカラサルナリ
C号ノ一點、各個區別ノ大小距離ヲ算測スル法也、
如水銀測表C号ヨリFイ水蒸儀ノ上行股端D号ニ至
ルマテノ距離ヲ以テCニ齊シトシ全水蒸ノ倉張ノ幾個
アトモスヘルヲルニ齊シト為シC号點ヨリ水銀柱九
アトモスヘルノ水蒸倉張ヲ顯示スル各個區別ニ至ル事
ノ距離ヲCニ齊シト為セハ *dan vindt men dit aan
tel door de formule.*

$$x = 38.2 + \frac{1}{2} \cdot 0 - \frac{1}{2} \cdot \sqrt{(16n - 2)^2 + 304}$$

水銀球E号内水銀ノ上面上ニ積聚シテ體管シ其
變化ヲ起スコアサラニメントスルニ、水蒸儀上ニ第
百三十六圖ノ製ニ倣ヒ製スヘシ其CD号(第二百三
八圖ヲ見ルヘシ)ハ玻璃ニテ造リ務メテ精密シ尽シ内径
少モ大小スルアルベガラス

儀管ノ内徑些モ大小十カラシムル丁固ヨリ均實ナル
能ハス且此器ヲ造製スニ關ル他ノ事故ニ因テ度表ノ分
別毎ニニノ艱難ヲ致スナリ又水蒸ノ倉張俄ニ減スル
間水銀少許罐中ニ駆入セラルマリ、或ハ大氣ノ

一多水銀ヲ透竄シ入ルコアリ此事ニ依テ度表ノ區夢
全ク謬誤ラ致ス尋常濛氣輪大氣ハ此儀器ノ用ニ
供スルニ的切タル流体クリトセス其故ハ此氣ヲ縮管
スル間酸素水銀ト相結七度表ノ區劃上ラ指示スニ
切當ナラサルコラ致ス故ニ此記セル常彈力流体ヲ縮
管下スル法ニ本ツキコノ水蒸儀ハコレラ覆シテ用ルコナ
水銀酸化ヲ承ルコ少キ水銀水蒸儀ヲ造ルラ好トス
ヘシ



以下
6丁
白紙

船用水蒸機盤考

舶用水蒸機盤考叙

此書を著ひや旨趣ハ新刻の書冊を用て学讓を富殖せんと欲てあれを述るにハあらそあれを作れる發端ハ下に舉たる事情に由れア

主國北

過にし年八月武官ひ貴胄子弟海軍学校に在て既に其学业^成功成^{主國北}した者を公けに會試を海軍のミニストリ川海軍大^{總督}少^猶れに嚴臨せり此時ニストル閣下道ハれ^{シテ}ハ武官ひ貴胄子弟水蒸機盤^{主國北}設施^{主國北}學に從事され^{シテ}ハ次第に精進して其學を大成^{シテ}し^{シテ}皆心を用ひ^{シテ}教導官^{主國北}ハあれを余に余せられ且又も

されりハ涅弟耳蘭田也海軍の將士武官貴胄比
リ免に此たしの官務仕事に就て一書を著作致
よしと余せられたり

此嚴金を奉^テいたれ^ハ余遂に此一書を集成せ^リハ水
蒸機盤^ハ設施^ハ學^ニ就て^ハこれを和蘭文に繕りたる
書藉^{ナシ}故に此^ハ举^ハに^ハあ^リ其書或^ハ浩瀚
に過ぎ^ハ或^ハ簡約^ハ失^ハ閣下の命^{ナシ}所^ニの本意^ト相
適^セ思^ハるれ^ハ已^ムも^アと^カして此著^アるか
り近^ハ此書を編輯^ス間上に^テある和蘭文の
書及^ヒ外藩の書を問^ハ引用^スき者^ハこれを蒐^ム

集^セり其他^ハ我^王國家の水蒸船^ニ全^カ給^シす^ム事^ト
ありし時見聞の間^ニ表明^セむ所^ニ記載^シ以^テ此書を
為^セりと云^多

今此書を作^ル所以の事故^ニ解明^シ者^ハ我^國軍の
水蒸^シ將士余^カ此書^ニ成^ルを待^リ心^憂きに過ぎ^リ刻成^ル
りて手^ヲ執^フ人^トを^ハれを讀^テ大^ニ快^ハト望^ム失^ム
あ^リと^ハん^ホと我^ハ恐^ムゆえに^{ヨリ}あれを斯^ニ陳^ム
あ^リと^ハか^マ

然^リと^ハ金^カ同^シ軍^将士^及武^官貴^胄目^のあ^リ
り^ハ水^蒸機^盤設^チ器具^ハ設^チせる状^ニ観^カる者

此書を讀て精く其説に通すもあらずあるハ余か此書
を著せる勞劬に酬て既に餘あるなま

一千八百四十七年一月メデンブルキ_{北和蘭州内}
にあるにおひて華。裴元士識

一小府におひて華。裴元士識

舶用水蒸機盤考卷之一

華句裴元士

著

箕作阮甫虔儒

翻

第一編

煖元 水蒸

一章 水蒸若くハ水蒸諸具を説出寸前略、煖元を講
し出をものハ無用の事にハあふきる。一、水蒸の
成る所以_{實に}ハ煖元に本川々すのなれハ水蒸機盤に
在て其魁首_{シテ}者ハ煖元マリハナリ
然れどもあれを詳に説くとされハ古人の早く

既に道出せる所の者を把りて再ひあれを反覆するの外他法なけれハ今あれを學ナシあとなナシ獨り水蒸機盤を一觀する間直に其商量する様要すく哉本性及び見象^{シマツ}を斯に举る

煖元ハ何物たるやあれを知る人あるち^{ナシ}而して其用ユウに明なると却ハ其流行する間事に觸れ^ム偶々^{タラニ}其体^{シメ}を推明む^ムきに足れる者あるなり凡そ煖元^{ヒヤウ}ハ大氣^{ヒカリ}も幾萬倍精微にして能く萬物の体中に寄寓^{シテ}し目^ヒにて睹み極かく次又秤量を一か^カを天性強き彈力を具有し其寄寓せる物体

にハ吾人の温煖^{アリニ觸く}と名くる知覚を生し其寓せる者去れハ寒^ク名を命^{スル}に至れる一奇性ある者たりと云多を^{意願}して足れり

二章 此物の最第一功能及以性情ハ下文^{シテ}如し温煖^{ヒヤウ}度増加^{スル}於ハ其諸物体^{ヒヤウ}形四面に增長志煖度減少^{スル}ハ^{シテ}ハ^{シテ}に反して縮小^{スル}を他言を以て^{シテ}あれを解^{スル}ハ凡^{タニ}凝体液体又滴瀝体大氣類ハ皆其体^{ヒヤウ}度増盛^{スル}ハ其容開張^{スル}に反^{スル}に及^{スル}瓶^{ヒヤウ}のハ縮小^{スル}冰邪^ク譬^ハA圖の丁字体^{ヒヤウ}の号孔^{ヒヤウ}圓柱^{アフ}号を刺入^{スル}と欲れハ先^{スル}丁字

体を焼て紅耶レ志むれハ其体開張を是に於て圓柱を刺入るに丁字体冷過クルムハ其体復縮小して圓柱を箱定ケル

三章 温煖

ヒカラサヨウ

其煖氣

出走ハシマツハ猶光線の光輝を含免ハシマツ体より照映ハシマツセ

出と多直線を爲して他体に中ハシマツ

幾様ハシマツ距離に排置せハシマツ物体に分ち界名ハシマツ温煖

ハ距離ハシマツ四角ハシマツ道理と毎に相反をハシマツ者ハシマツ

物体ハシマツ表面の状異ハシマツ形ハシマツに準して温煖を線射ハシマツ界ハシマツ

はに多少ハシマツ殊ハシマツ形ハシマツありハシマツ温煖を分界ハシマツ体を充實ハシマツ

ニニの物

坎窪ハシマツ管ハシマツ表面を極ハシマツせハシマツ者ハシマツこれを磨礱ハシマツ志て
平滑ハシマツ耶レセハシマツ者ハシマツよりも温煖ハシマツ疏越ハシマツ度多し水
蒸善くハシマツ二ハシマツ三ハシマツの煖熟蒸氣を流通せ志むハシマツ管筒ハシマツ
如ハシマツあれを磨擦ハシマツして光彩を發ハシマツをハシマツに爲をハシマツ
或ハシマツ別ハシマツ油ハシマツ漆ハシマツ用ハシマツあれを塗抹ハシマツ者ハシマツと向ハシマツ也
皆此事ハシマツ外ハシマツ耶レあと触ハシマツハハシマツ

四章 温暖に爲せハシマツ体を以て冷体に觸れ志むれ尤
温暖此一端ハシマツ他ハシマツ一端ハシマツ流通ハシマツ此冷体ハシマツ彼
此而端ハシマツ燒道ハシマツ耶レ至然ハシマツ其彼此ハシマツ端ハシマツ偏多
燒過ハシマツ物ハシマツ成せ物ハシマツ性質ハシマツ關係ハシマツして生

を其物体^ハ一端を燐過され^ハ速に其燐を諸他端
に分界をなす性ある物ハ其疾速^{ヒ度}可依りてあれ
を好尊体^ト名川^タ此導引ハあれを他^ハ導引せ^ハ
汝^ハ体^ニ比^チされハ其疾速^邪はあり幾信た^ハを知^ハ
魚^可く^ハ好尊体^ハ諸金類^メ以^ハ邪^リ木材灰^大氣^を
導引を^ハお^ヒ好か^ハシ^ム者^邪り

五章 燐元^ハ其増減に因て全く物体^化状態^を変^化
する者た^リあれを細説^シれハ燐元^ハ添加^セル物体
ハ凝堅^變して流動^シ邪^リ流動更に变^化して氣^状と
邪^ハ力^ハを精微^に鮮明^セんにハ先つ第一に知^ハ

ト^ハお^ヒあり^ハ凡^ト物体^ハ許多甚^シ微^シ分子^{モレ}々
不^ト成^リ其分子^{至密}に相比^シ并^シ汝^者た^{至然}が^ハ
も此分子^ハ彼^{千百相}比^シ并^シ也^ハ距離^{ドリ}更に又精
細微渺^ニ邪^ハ一他体^ハりて能^シ、^ハ其分子^ハ相距^{の間}
に自在^ニ鑽穿^シ入^スに足^ハハ^シ孔^{室隙}^ハ自^ト相
附接^セし所^{アリ}ト思^多シ^{第二章}に云^フは如
く凡^百の体^ハ開張縮小^{アリ}是^ハ其證^邪リ^其第二に
知^ハ汝^た少^ヒハ^凡、^ト物体^内千^百分子^ハ間^ニハ^{間断}
邪^ハ二様^ヒ力^勢流行^キ其^一を引カ^ング^スカラク
ト^空云^フ此^カ力^勢を以^テ物体^ハ造立^セる分子^{を送}ハ^テニ

其故常を失ふありと邪可ト志免人少ニ又其一を煖
元ト云々物体内の分子を開張して分解せ志免人
ト云々本性モト
ト云々今此ニ力物体内に在て偏勝あるかと邪可ト
かハ物其故常也形状を失ふありと邪し然るに此二
力内共一譬ハ煖力ワルムテ偏勝されハ煖勢獨偏
勝し他共一力減少を是を以て温煖増盛邪共に及
てハ其体終に変換して氣状ツ邪共「是に反し
て煖氣次第に減ずるハ引力偏盛し其物今ハ凝体
と邪もホト推知る一ト是に由て觀はとたハ引力
盛に志て煖力に勝ヒ故ハ物体共形状堅凝ト邪共

引力煖力中を浮て平均邪共ハ流動共体ツ邪リ煖
力大に引力に充てハ氣状ツ邪共故に煖氣共者無
微甚に因て故み物体獨り此三種共形状を為す者
大至今此三種形状を水に就て説出さくにハ其本
然流体共形状ハ二力偏勝邪者大至此時に方で
煖氣減少されハ水其流体より変換志て堅凝ツ邪
リ因て即水ト邪共若しあれに温煖を添えゆる事
ハ永堅故物復水で邪リ更に仍温煖を加多る事と
云りて止あされハ引力久キモして増衰ハ水其流
動共形を失ひ氣状ツ邪リて水蒸に化す是故に

?

水蒸ハ水玷分子上に云ハ体状を得て煖氣に分刷
盪衝せしめで故_{流動}水玷分子附接せし時よりも其
本距離_間開せし者に過_すふ耶り

煖元_此力勢ハ乃思_は人ありて_かれを増大_{せんだい}其
力勢ハ諸物体を化して氣状と_{かじょう}耶_は力勢に超越_{せうえ}
ゆあと數十倍_{ばく}耶_るに至_る一

六章 萬体上に存し流行して_{ひんこうして}間断_{かんたん}ゆあと_は耶_る上
に举た_は二力_{りき}外又第三_{だいさん}一物_{ひともの}ありて_か知_しゆあと
を要_{むすび}一_じ是_ぜハ即ち蒙氣輪_{もうきりん}耶_は此物ハ凡百物体
を遺_{のこ}すに皆_{みな}れを_れ體_{たい}して一_も遁_{とお}る所_{ところ}あゆむ

ト耶_は是_ぜを以て亦水の体をも同く體_{たい}する耶_り
今一時水此體_{たい}を免_{のぞ}ムト_と假想_{げそう}を_あれを細説_{さいせつ}
されハ權_{ごん}に蒙氣輪_{もうきりん}を除_{のぞ}ム_と一想_{一そう}を為_なモ少_{すくな}ヒ
其水一半ハ必_しモ_と一次に水蒸に化_かム_と知_しム

1
一時水_は體_{たい}を除_{のぞ}ム去_は法排氣鍾_は鍾_{じゆう}下_に水
を置_はム是_ぜに於_て大氣_{だいき}を拔_{ぬく}ム_とハ乃_{すなは}其_{その}状_{じよう}
を親_{ちか}るを得_めス_と既_{すでに}あれを拔_{ぬく}ム_と及_て水初_{はじ}ハ
其容減縮_{げんしゆく}セシ者_は今ハ水蒸_{じょう}形_{けい}ト_は耶_りて鍾_{じゆう}下_に

氤氳_{ひんのう}

此故に蒙氣輪ハ蒸叢を透闇をは力たれ故に水此
體筈に勝つと能ハレは前ハ流動より変して氣
状ト耶はあと能ハモ是を以て今生し未みは水蒸
ハ蒙氣輪は體筈に比例して其體筈は大小ト相計
渺古は一力を具多ニ至る故に寒暑針^{ホノ度}高のふ
也ふとがハ其水蒸に化をはも六速耶リ

七章 凡物体ハ煖氣^{ヒート}感動を抗拒して續てあれに
屈せ者あはれと耶志但し各物其気に感動をは
状因一耶はち等^{シテ}譬ハ其物^{ヒト}如^シハ其感動に
遇ヘハ乃^チ鎔消をはれと猶夫異性^{ヒト}成分^{ヒト}を成立

物ハ其他物を融化をはる如しあれを例すれハ海
水^{ヒド}如^シハ罐中にて蒸叢をはるハ鹽、加爾基、及^シ其
餘^{ヒト}成分罐底に遺留せれども其流動せは部分ハ
獨^{ヒト}水蒸に化し去はれとし

諸凝体及び液体ハ大槻冷寒^{ヒート}に蒸叢をはりハ温
暖中に在て多く^{ヒト}蒸をは者たり然れども又別様
蒸叢あり今大寒に遇^シは氷塊も日^{ヒト}其分量減
を以觀^シし

八章 煖^{ヒート}温^{ヒート}に三種^{ヒト}別あり曰く潜結^{ヒート}煊^{ゲボン}曰
く游離^{ヒート}煊^{ゲボン}曰く異性^{ヒト}煊^{ゲボン}テレイキ又エイ
ケ^{ヒート}メレイキ

形を変換されたり耶
此新に賊界セシ煖度ハ古
遊離點火度

潛結游離^{シテ}二溫煖を説て更に猶明白耶と志む本
にハ下文^{ヒテ}譬喻を知ふを適切^{シキ}也セナ度一百
度に分川者^{シテ}水一^{セイ}に零度^{シテ}水一^{セイ}是其將に冰
了んと^{シテ}海際^ニ在り^シを加多^ルハ三十七度^{シテ}水二
度^{シテ}氷一^{セイ}此其水既に冰結せ^ル時に在りを合^カ計
れハ零度^{シテ}水二^{セイ}を得^ス那^リ然^シとも同^一七十五度^{シテ}水二
度^{シテ}氷一^{セイ}水を融^ス消^スす^{シテ}用を為^セシのみにし
其温煖^{シテ}小^シり氷を融^ス消^スす^{シテ}用を為^セシのみにし

て少しくも煖度を長きゆかと耶し此温煖ハ吾人五
神^外_{温管}み知覺を逃脱して毫も觸知^{の感應力外に}へかく又驗
冷熱^{温管}器^{を逃脱}して少しくも其度を升^{あが}め^{未嘗}耶
至然^シ少^ハ則ち其温煖ハ消滅せゆや而して終に消
滅をゆ出^シト耶し唯潜匿して顯露せゆのみあれ
潛匿^又潜結^{温管}名号を得^ス所以たり今^又ハ驗冷熱^{温管}器^を
備へ^サは人に在てあれを驗^ス方法を^{シテ}舉示^シ一^サ
少^ハ雪^ト氷^冷耶^ハ一^サの水^トを各別に一盆に盛^{アリ}
共に^カ火^{屋室を暖}み上^ニに安置^シ二盆をして同
度^少煖^{を得}せ^ム也^ハ其一盆^ハ僅に融^セ他の一

益ハ既に微温^シ耶

是故に潜結^少温煖^ハ密に物体^ヲ結合^シ其游離^シ
者ハ然^シモ

九章 一箇^シ物^体其原形^を変^シ堅^シなり^リ流動^ニ換
流^シ際に在^テハ大量^シ游離^シ煖^元出^レと結合^シ其^ノ物
体^シ此^ノ流動^の状^を得^ルハ實に流體内^ニ含蓄^{結合}
セ^シ温煖大^ニ其体内^ニ積^累せ^ル故に由^レるのみ
是故に是^ノ變化^シ前^ニハ別に許多分量^シ温煖^を資
り用^シ今試驗^シゆに零度^の水^を簇^シ度^ニ至^ラむ^シ
ゆにハ百度^シ煖^氣を須^ム耶^リ然^シと謂^ハ水^を

零度より百度の水蒸に化せ志む冷にハ心キ六百五十度お煖氣を須多体を見ゆ出れ其百度お水蒸を生むはニハ此お如お許多お温煖を得ゆに因れり然れども驗温管ハ游離せゆ百度お煖を現ゆサム邪リ

然れども此許多お温煖ハ驗温管上に其度を覗セキ又五官にて知覚を極可ト片ゆと却ハ何を以て此許多お煖氣を儀存すゆを知ゆやて疑問をゆ者あらん此許多お煖氣を儀存すゆを知ゆハ獨り試験に由てあれを知ゆサム今百度お水蒸一升を某

量お冷水半和し又百度お滾湯一升に上と同し度の冷水同量を和すがハ水中に入れたは驗温管の甲水中に在る者ハ乙水内に刺したは者よりも外ゆあと幾倍より(上に云へは六百五十の数也)此事下に再説せんとも

温煖お第三種ハ異性の煖ト云キ元此物体ハ他物体に比キハ多く煖を取る性ルトバード多くのガバシテイト即ちクリントラシングバールハイド用モアリ其物体異耶ハ其異性お煖も亦異邪リ異性お煖とハ凡て物体同等お煖氣を覺ゆは者も其

煖元を取添分量を比較するに彼是齊しのうは
者を云々耶り物体皆質異、故ゆえ者ハナれをして因
等其温煖に至る事あるとも其温煖^{を含む}分量ハ決て
因しきりにハ固ヒリ異論あはせヒ耶しおれを
別語にて細説せんに二個其等に寒冷耶体を
取りあれを因度に温耶^{を免ん}とお甲体ハ乙体
とりも幾多其温煖を列くを云々耶り

十章 上文に説出せゆ説を明了耶^をもゆにハ下
文^ニ記載を知ゆを極て有益とぞ

(自注ホーリー・ラール官歌)而^レ草^レの著せは水蒸

機盤説の中より抜抄せり本文に云へば如く此下
に引たは表ハ開張及び引導の表^ニ耶し用事はも
りハ上文に説出せは説を明々耶^をもは益殊に多
を以て此表^ニ下別に引導多少を開明す^ハ
矣インゲニウルベイ^ズストームラールト^{官名水}
建術^スノ^ジデ^シボ^ス人^ニの著せは實用表を列載して
覧者に補裨^モ

物体を煖免て零度より百度に至りて其長^ニの開張を
体^ニおと左^ニ表^スおせし

紅銅

0、00一七一二三

黄銅

0.00一八七八ニ

鑄鐵

0.00一一一

鉛

0.00一二六

亜鉛

0.00二二八

白玻璃

0.00二二五

玻璃管内の水銀

0.0一五八七三

慶儒按に此に舉たは表ハエル尺にて物体ヒ百度ヒ煖に遇て伸長を体多少の寸を挙たシ耶リ水銀ハ極て多く開張スル玻璃ハ極て開張シトムと微少耶冷者たり且を以て此二物を用て驗温管を製シ

は耶リ

諸物体ヒ温煖を導達シは力勢ハ

銅を 一〇〇〇ヒ耶セハ

鉛 錫 亜鉛ハ

四〇二

鉛 錫 亜鉛ハ

三三八

鉛 錫 亜鉛ハ

二〇〇

是に因て推せハ銅を以て引導シシの尤多ものとモ
(四章參攷シ)

百度ヒ驗温管に据て二三の彰著耶体煖度を開載セ

る表

鎔鐵甘鍋の熱

鐵ス鎔スハ

四〇〇〇

一九〇〇至二五〇〇

紅銅ス鎔スハ黃銅ス鎔スハ

一〇四〇

五六〇至六五〇

煤火ス熱ハ亞鉛ス鎔スハ

三七〇至三四〇

水銀ス滾沸スハ鉛ス鎔スハ

三五〇至三一五

ビス島ト銀ス鎔スハ

二六〇至三二五

鋅ス鎔スハ

二三八至二八三

錫ス鎔スハ

二一〇至二二八

錫三分蒼銀五分鉛二分を
以合成せは金ス鎔スハ

一〇〇

鹽に飽過せは水の滾沸を

るハ

二一〇

淨水ス滾沸スハ

一〇〇

燒酒ス滾沸スハ

八七

異性ス煖スハ其表龙ス出スし沸スハ

三七

水を 一と弔せハ

鑄鉄ハ 〇、一四

鍛鉄ハ 〇、一二五〇至〇、一一〇五

驗温管の度を分ては異因の表

滾水 ハ〇 洋冰 〇

滾水 一〇〇 洋冰 〇

滾水 二一二 洋冰 三二

列氏管
百度管

此書中別に名号を掲げ云ハシは者ハ皆百度管を用ナム邪リ

十一章 六章に述へたは物体の運動より水蒸に変

換也は説に由て考ナレハ此変換ハ獨り煖元に由て
起るもとを明証を海に足ナリ此説既に明瞭耶海
とがハ下文に举たる水蒸ノト社正解デスニキ
カリハタムレケレイヒングも一讀の下自了了然たる事あ
人可

水蒸ハ水邪リ但し其水に煖元を充盈志て其流動
狀を失^ハに至れ^ル者にて騰蒸氣様の彈力あ
る流体に変換せ^ハ那リ

凡^ハ水蒸ハ人^々皆謂^フく熒熱邪^ハ白色^{アリ}蒸氣其狀
恰^ニ雲^ニあり多滾水の面^ミリ騰^{カク}せ^ル者たりと然れ

アモ此雪ノ如其形ハ獨外氣ノ冷ニ觸れて發キハ
所ナリ何ト耶れハ試みニ水蒸を大氣耶^カ筒中ニ
承^カれハ少^シ色采^カ透明耶^カ流体た至其熱
度^カ多少に隨て其彈力^カ大小同^カアリ以て微
支^カ屈^カシ

上ニ云ヘシ如く水蒸ハ固觀^カ水ト為^カ支^カ屈^カ然^カ
トも其水火熱ニ灼^カ可^リ其力ニ由^カテ四面ニ開張
シ^カ大^カ邪^カ地^カ面^カニ弥^カ論^カシ^カニ至^カレ^カ者^カたり此^カ
又如^カ大^カ邪^カ地^カ面^カニ占^カム^カ及^カテハ大^カニ推張
其勢^カ生^カシ因^カテ其道路ニ在^カ者^ハ皆^カ出^カれ^カ露^カ斧^カ

生^カ流^カ邪^カ

余^カ考^カナ^カ所^カ依^カ

又別ニ水蒸^カ明白^カ邪^カ解語^{アリ}此ホ^カ一^カグレ^カ一^カラ
一^カル歇耳^カ覃^カ造語^ニ出^カリ其語^ニ曰^カく

水蒸ハ水球^カを聚^カえて成^カれ^カ水蒸氣^カ様^カ流体^邪^カリ其
水球^カ元^カ彈^カ力^{アリ}力^カ勢^ニ彈^カ飛^カセ^カレ^カ自^カ相
依附^カす^カ出^カと能^カハ^カ者^カ聚^カえて成^カれ^カ水蒸氣^状
狀^カ流^カ體^邪^カ

十二章 此故ニ水蒸ハ水邪^カ但^カ水ニ溫^カ煖^カを加^カ多^カム
者^邪^カ是^カを以^カて水蒸をして再^シ水ト^カ耶^カさん^トも^カ
は^ニハ^カ唯^カ煖^カ元^カを除^カくニ在^カる^カミ^カ煖^カ元^カを陰^カくニハ

或ハ水蒸を以て寒体に觸れ志あゝト是に由て煖元水を捨て寒体に往か以て平均を為せんと欲を或ハ水蒸内に冷水を灌注するも水を挽て原水に復す極し水蒸ガ煖氣を奪除して原水ヒ邪キ所作ハ水をフルモケン稍厚邪と云ひ或ハコシテニセーレン之義絞筆と云々水を注入す水をインウクテレン灌注の義と名づけ出水に用多添水をイシ

丘クチ! ワートルと名づく

十三章 水蒸内に儀存せぬ温煖度ハ煖度を測知をム蓋什テルモメートル管にてハ量ム

片断の故に看者始免て見て即其分量を道出すも其儀存せぬ金大の分量多^{アハナ}に的中^{カビ}す能^{タス}ハ^{アハ}すは^ハし水を口を鎖さ^シ水桶に入れ大気^カ露管^サせはま^ハにあれを煮る^シ此滚水^ヒリ騰糞^モ水蒸^ガ内管昇て百度^ヒト邪^シ此滚水^ヒリ騰糞^モ水蒸^ガ内に既記せぬ如多數回^ヒ試験に由て細查^シムに此水蒸^ガ一小誅^ハ冷水^ヒリ混^シすに及て滚水^ヒリ大量^ハ如多共^ヒに同^レく冷水^ヒリ温煖^モト志むは效力を^ハ為^シテ^シ明^カ此際に在て此温煖邪^シ志むは效力^ハ水

蒸内に恰モ潜結潜匿すはに似リ本煖氣より為し起
ちに非ギして果何れ所所在より出来かゆ也此故
を以てあれを水蒸ス潛結セシ温煖^テ名川く某分
量此渾力^テ水蒸に含有せシ本度温熱^テ外にして其水
量此流動水に含有セシ本度温熱^テ外にして其水
ハ別に水蒸ト曰しく身^手に觸て自ラ温熱を覺ゆ
たナ此煖度を含有シガハ取リ此潜結^テ煖ハ五百
度^テ其游離^テ煖を并せ算^テ六百五十度ト那
シ下文に其精説を述んとシ

十四章 上^テ六章に煖元を述多^テ間冗物体^テ此形狀

トリ彼形状に変換^テシ^テハ引カ煖カ^テ外又濛氣
輪^テ此^テ煖^テ力ト云^テ他力其際に行ハシ^テを説^キ
リ口を開いた^テ銅鉄桶内にて温炙^テシ^テ水上を
壁^テ斧^テ大氣ハ其変換して水蒸ト那^テを妨^キ是
を以^テ古^テれを克伏せシ^テ乃^テに若此大氣^テ障碍
を除^キ去り若くハ排開^テシ^テを得^テシ^テト^テアシハ其
煖度^テ百度^テに昇^テシ^テして水乃^テ水蒸ト那^テト^テアシ
く此^テ如^テ如^テ耶^テ出^キアシハ五六度等^テ煖氣
にして百度^テ比^テ者^テ少^キシ^テ好^キ水蒸^テを生^キし得^キシ^テ但^シ
此^テ水蒸ハストトム^ト唱^テミ^テ水蒸機盤家法マニ子

獨に使用をゆ所者ト自異也至其使用をゆ水蒸ハ
滾水蒸氣も百度及百度以上に温煖せふゆ者也
みなり

自注 凡、百度也云名者ハ洋水に就てあれを云々
珍み若、海水を用ひ者ハ百一度にして初免て滾
沸し鹽及び他より異質を混す者ハ一百三度一
百四度に至て滾沸す者ある耶り

十五章 水蒸を觀覽すは際には在て細辨ちく者四
件あり

其一 水蒸竈性情テムペラ

水蒸竈性情テムペラ

其二 水蒸竈翕張スパン
ニンゲン

水蒸竈開展ライドヘイド

其三 水蒸竈緻密デクト

水蒸竈緻密デクト

其四

水蒸竈緻密デクト

十六章 水を罐に入れ蓋を閉めて火に加へて其滾沸せ志
多て遂に水蒸を發すに至るもれハ其滾水内
に挿みた溫管昇て百度に至る火より賊等せ
其餘の溫熱ハ驗溫管温度計も度を昇るにあらず
し其熱ハ唯速に水蒸を發する用を爲すのみにて
驗溫管は水と水蒸とに納めた者ハ依然として
故に火に上法に反し其蓋を塞むて其半に

水を填て其半ハ大氣を排^イいて真空ト耶志^{シテ}後
其水を熱^ヒキゆ^シハ其事体全く變^イて上に云^ヘ
所の者^ヤ同^シ可^リ此時に方^テハ水に賊^シ世
ゆ^シ暖^ム氣^ハ初^ニ云^ヘは如^ク大半水内及^ヒ水蒸^内に
其^ミ積^モ疊^セ也^テ兩物内^ヒ驗温管今ハ乃^チ百度以上^度
度^ヲ現^スゆ^シ也^テ此度^ヲ名川^{ゆゑ}水蒸^の性情^{ペラ}
ル^一云^々此性情^ヲ以^テ潛^シ結^ムの^暖と混^モ可^リト
も^潜結^ム暖^ハ其^ミ說^上に述^カ罐^中に水^ヲ盈^メて少
しも空隙^ヲ有^リ細心^ニ其^口を塞^フ火熱^をし
て初際^度其^ミ保續^シて止^マさむ^シも^レハ

其^ミ水障碍^セシ^カテストーム^ニ化^シム^ト能^ハモ但
1. 罐^子其^ミ邊^縫俄然^シして坼^開キゆ^シあれハ其^ミ水
一^举に水蒸^ニ化^シム^ト同^クストーム^{其^ミを罐^中に}
に盈^滿せ^ル者^ハ其^ミストーム^{許多^ト其^ミ暖^氣を攝^取シ其^ミ}
性情尤^大に雛^亢也

十七章 水蒸^{其^水蒸^ハ外^化シ^テ外^騰す^前}罐^子を^テ性^を具^有す^シ其^ミハ先
つ^シ其^ミ水蒸^ト為^シ際^ニ在^テあれ^を驗^知するに足^れ
り^水上^を罐^子を^テ汝^濛氣輪^を先^づ克^チ去^ルを要^キ
汝^濛氣^ハ水蒸^百度<sup>其^ミ者^ハ其^ミ罐^子大氣^{其^ミ罐^子に比^例}
も大氣^{其^ミ罐^子ハ其^ミ中數涅^{其^ミ方寸^{其^ミ面^を涅^シ一斤零}}}</sup>

丙三錢又英方寸^{アーチ}斗面を英^{アーチ}十四斤七兩^{アーチ}重^{アーチ}にて
鎮墜する者たり且此鬱筈^{アーチ}管を機盤に従事すは術
家皆明白に^{アーチ}これを確証し^{アーチ}大に其理を推究すは
に心を用^{アーチ}多^{アーチ}有^{アーチ}而其水を水蒸と艶を所以^{アーチ}
煖元^{アーチ}ハ開張^{アーチ}性あ^{アーチ}て解明を^{アーチ}あとありむ是より
して又水蒸も自^{アーチ}彈力を具^{アーチ}て流體た^{アーチ}水を判裁
吉得^{アーチ}あと^{アーチ}る^{アーチ}し

上に云へ^{アーチ}氷^{アーチ}とく百度^{アーチ}水蒸ハ^{アーチ}濛氣輪^{アーチ}鬱筈^{アーチ}管^{アーチ}
同^{アーチ}相比^{アーチ}例を^{アーチ}は開張^{アーチ}鬱筈^{アーチ}管を為^{アーチ}す^{アーチ}し故に
濛氣輪^{アーチ}に支^{アーチ}一駐^{アーチ}の^{アーチ}頑柱^{アーチ}より^{アーチ}水蒸^{アーチ}度を測

るに用^{アーチ}多^{アーチ}を^{アーチ}以て水蒸^{アーチ}鬱筈^{アーチ}管又ハ開張^{アーチ}^{アーチ}れ
を機盤に施し^{アーチ}用^{アーチ}多^{アーチ}に方^{アーチ}てハ之^{アーチ}を力勢^{アーチ}と呼^{アーチ}多^{アーチ}の
度を測量^{アーチ}す^{アーチ}一法ト^{アーチ}那^{アーチ}用^{アーチ}ゴロ^{アーチ}テ^{アーチ}ン^{アーチ}導^{アーチ}ヤリ
メス^{アーチ}スト^{アーチ}に及^{アーチ}て始^{アーチ}て其法^{アーチ}を精覈^{アーチ}して諸般^{アーチ}鬱筈^{アーチ}熱情^{アーチ}
テムペラ^{アーチ}の度を限定せ^{アーチ}其法密塞^{アーチ}せは罐子内に
て水を温^{アーチ}た^{アーチ}其内に^{アーチ}驗温管^{アーチ}を刺し入れ別に罐子
に屈曲^{アーチ}せ^{アーチ}管を設^{アーチ}り一半に水銀を充て水銀^{アーチ}一
端^{アーチ}直^{アーチ}に水蒸^{アーチ}と相接^{アーチ}して^{アーチ}これを堆^{アーチ}鬱^{アーチ}と^{アーチ}志
む是に於て^{アーチ}驗温管上及び^{アーチ}頑邊に附^{アーチ}した^{アーチ}尺度上
に自^{アーチ}其數色^{アーチ}度分を現^{アーチ}して幾何度^{アーチ}分た^{アーチ}を目

其試験に由て創めて造り得たる表ハ唯濛氣輪^スヒ^ス翁張^ス度^ス合^スす^ス水蒸^ス度^スを^ス表^スし^ス候^ス也^ス此表^スハ^ス實^ス此表^スハ^ス實^ス也^ス

其創製に居れり

翁說文起也廣韻
一熾也廣韻炎又
動也盛

試験に由て創めて造り得たる表ハ唯濛氣輪^スヒ^ス翁張^ス度^ス合^スす^ス水蒸^ス度^スを^ス表^スし^ス候^ス也^ス此表^スハ^ス實^ス此表^スハ^ス實^ス也^ス

二人又おれを精測して濛氣輪^ス翁張^スに二十四倍
せゆ水蒸^ス翁張^スを起せりおれを測量^スすは^ス水
蒸^スを二十六エル^ス長^スの水晶管内に通じ頸柱にて
おれを測量し務て其熱情に應したる翁張^スの度を
密合^スせ志^スえておれを記せ^ス其説ハ卷末^ス第一第
二表を參攷^スし其初行ハ熱情^ス度三行ハ翁張^ス
をゆふと水銀柱^ス高^ス幾許なゆを見^ハし其第二行
ハ涅^スの方^ス上^スを水蒸にて體^ス筈^スを^ス何^ス重^ス耶^スを
示せり

其表に記したる諸試験に藉て考^スおれハ熱情^ス増
加^スゆふと翁張^スも増加^スゆ^ハ甚^ス其度を殊に大
き故に同一^ス理を以ておれを測量^スかくを
おれを細説^スゆハ一百度^ス水蒸^スハ七十六寸^ス水

銀柱を駐むるや水蒸ハ二に百を乗せ水蒸ハ二に
七十六ナナシシキを乗せは水銀柱を駐む一し而て其のあと
能ハモリス倅張が増加するハ熱情が増加すはと
りも速耶リトヒ表を見るに一百二十度五分^{アラタ}
水蒸ハ既に一百五十二寸^{アラタ}水銀柱を駐む以徵を
「」

十八章 水蒸^{スイ}倅張古は少と幾何度^{カウド}也を著^{スル}ハ
にハ出^{スル}を濛氣輪^{スイ}壓^{スイ}管^{カン}と比例^{スル}を常習^{スル}と
一百度^{ハヤシ}を超越^{スル}セ^ス水蒸^{スイ}人^ノミ知道^{スル}セ^ス如^ク濛氣輪^{スイ}倅
張^スに超越^{スル}セ^ス大張力^スを保^テミ其倅張^スの大力勢^ス増

て濛氣輪^{スイ}倅張^スに倍^{スル}セ^スと或^ハ何度^{カウド}也を著^{スル}ハ
倍^{スル}セ^ス耶^ハ海^ヲ至^ルハ出^{スル}を名^ムニ倍^{スル}三倍^{スル}又ハニ尼^ニ
信^{アトモス}ヘール^ス濛氣輪^{スイ}壓^{スイ}管^{カン}と名^フニアトモス^ヘ
ル^スと名^ム川^ヲ水蒸^{スイ}ハ其本然^{スル}性^ス力を云^ヘハ三
アトモス^ヘル^ス倅張^スを存^ス但^シ其一倍^{スル}アトモ
ス^ヘル^スハ出^{スル}を留^メて水蒸^{スイ}を續^ケ駐^ム海^ニ供^ス
ニアトモス^ヘル^ス水蒸^{スイ}ト云^フ者^ハ其倅張^ス濛氣
輪^{スイ}倅張^スに越^{スル}出^スニ^ニ信^ニ準^スセ^ス海^ヲ至^ルアツテ^ス驗^ス
温管^スの百度^ハに超越^{スル}セ^ス高度^スに昇^ル者^{云々}

和蘭にてハ水蒸^ス翕張半アトモスヘルに過る
カは者ハ^シれを輕體水蒸と名川以半アトモスヘ
リルト^リ三アトモスヘルに至る^{シテ}を中體と
名づけ其以上の者ハ^シれを重體と名川く

十九章 温免て百度に至れ^シ水を蒸^スむ^シハ騰起
セ^シ水蒸ハ^シ甚^シ輕虛形^ス流体あり此流体ハ水蒸^ス
姿^ス形^スとも其秤量ハ其本^シ資源^スセ^シ水と因秤量
形^スとも許大形^スは空間に占據^シム^シホ^シ水に比^シ
れハ^シ信たり譬^シハ一掌立方^ス水ハ涅^ス詰^シ一斤^ス
量たり今此一掌立方^ス水を百度^ス煖^シム^シ水蒸^ス形

キ^シハ一千七百立方掌^ス空隙に填満^シテ此
熱情^スを挾^シム^シ水蒸^ス容^ス即ち其開展^スハ水の原容^スに
比^シム^シハ千七百倍^スたり今大氣^ハ水より輕^シく^シあ^リト
七百八信^{ナシ}た^シハ此^ス水蒸^スハ大氣^{より}も輕^シく^シ出^ス
ト零信四十五^{ナシ}又水^ハ其^シ水蒸^ス形^スに変^シム^シハ
原水^ス容^ストリも鉅^シ大形^スふ^シヒ一千七百倍^スと形^ス
本性^{アリ}ハ^シト^モ亦^シノ^ト氏^ス数回反復^シ志^テハ^シを試^ム
驗^シセ^シリ其^シ法^ス水蒸^スを^シ槽^ス中^シに流通^シ志^テ其^シ後^シあれ
を冷^シ過^シセ^シム^シハ其^シ定量^ス水^スト^リして此^ス信^ス數^ス
容^スを為^シム^シを証^シ得^シノ^トノ^ト

此試験に由りて考へれハ其熱度及し翕張亢盛を
亦に隨ひて其容ハ却て縮少するも明白耶リ一
百二十一度五分に在てハ其容一百度五分に至る
是に由て推とむハ水蒸ハ濛氣輪内の大氣と同一
制律に率由志開展ハ翕張の力勢と相反せハ道理
に由み得を判別も又に足あり

二十章 水を密閉せハ罐内にて煮て其情を百度以
上に升るもむれハ水蒸次第に其内に堆積し其熱
度に應して其體實も共に隨て増大を故に同一室
隙に充積して隨て其重^サを加^ナ益密閉せハ罐子内に

在て同一空間取れども水蒸^ス翕張強弱を亦に應
して水蒸^ス分子隨て多少を一し故に一百二十一
度五分^ス水蒸其翕張ニアトモスヘルの者ニ^ル
八十^分に百度^ス熱にて一アトモスヘル^ナ水
蒸一^ルの占得た^シ空隙間に充斤するに至は是を
以てニアトモスヘル^ス水蒸ハ一アトモスヘル
川^ス水蒸と同一の稠密と即は其度ハ水^{の密度}に比され
ハ唯八百五十^分の一に居たり

自注水蒸^ス密^シ度に就て更^ナれを研究せん
ト欲せハ歌^ハ歌^ハ而^ハ覃氏^スストーム左^ルキトイ父^ヲ

一列及ひアシデンボス玷ベシケレイヒンググデル
ストームマレ子を參覈をへし

熱度殊邪れハ水蒸玷密度も随て疎密玷殊を生ず
水蒸翕張亢盛し内に煖元を含免水を納るゝよ
と增多に應して其翕張^セを水蒸^セ重愈增其墜
重を加^ナ一エル立方^セ水蒸其翕張濛氣輪^セ體笨
と相比準^ナ者ハ其重^ナ五十九口^一ドたり何ヒ邪
れハ一千七百立方掌ハ一^セの重^ナたは可故邪^リ今
其翕張を一倍されハ其重^ナも一倍ヒ邪^リ然るに煖
元ハ秤量をつておらぬ故に此一倍^ナ重^ナハ水蒸

内に含み容れた水^セ秤量たはおヒ知る^ヘ一
エル立方^セ水蒸其热情百度にして一アトモスヘ
一エル玷者を蒸し出^シにハ五十九口^一ド^ナ水を須
多^タ一^セエル立方^セ水蒸其翕張ニアトモ
スヘル玷者を蒸^シにハ二に五十九口^一ド^ナ或
下文に明白邪^リ如く正^{百十}ミリメー^ル、^ルだ^ルタル^セテ^ルゼ^ルを^ルを^ル乗^シす^ル者を

須多^タは^ル是故に水蒸^セ密度ハ正に翕張^セ力勢
に比例^シキ

然れども此末條^セ事を驗知^シてはハ今蒸^シせば
水蒸ハ其原水と一脉^セ混じヒテ相流通せ^ル時

に在て誠に其云へ所故如く然は雖し若し水蒸
と其蒸出る所の原水と相接せにして各相離隔あ
ル者ハ其比例既断裂まとまつて一し驗者心斯に眼
を着ふを専要す

凡上に云「所事体を觀んと欲る者ハ毎必其水蒸
ハ原水と脈絡相流通する所や流通既絶たる所やを熟
慮す所を要を亟し其故ハ水蒸と原水と脈絡相接
す所と即ハ其熟姑度変化を所と所と其脈管姑
力勢と相符合して粗麁を所所を詔さるに足
体若し夫水蒸と原水と氣息相通せば前者ハ全多

あれと相反する加故以至此を以^テ翕張と緻密姑度
と絞増すに非ずれハ決て熟度を増し加多るに法
邪多又熟度を増に非ずれハ決て其翕張と緻密と
を増し加多る所と能ハ^テ所^テ邪り故に此形勢に於
て水蒸ハ其熱情の度に順^テ緻密と體管とが最高度
立ムキシを保持者たれハ其熟度と翕張と所間に一
定して易多無可^テ所^テ關係あり又其熟度と緻密
姑度と所間にも同様な交渉ありて決して易多
へ^テ所^テ所^テなり

〔百注〕水蒸其緻密姑最高度を保ちて至鉅大姑分

其熟度に順して

量ひ水を含容をほに至れハ(本文に云へは如き)

あれを飽過水蒸と名川く

あれに反して水蒸と水と並通路断をゆき故ハ
熱度増加あるとも密度^敏が最高度ハ已歇む其故ハ
水蒸に化^シ原水^ヒ脉已絶したれハ其熱性^ヒ
度に随て増加^シ故^ニ密^度も^レ度後^モ増^シに由耶^ハ耶
リ是に於て爰に記せば熱度と翕張との關係及び
熱度と密^度の質との關係即ち先に云々所^レ規則
今ハ復^シ存^スはあ^リ耶^ハ而して別法を此間に用
ひ^カ甲^モ時^の宜^シに随て増^シ進^シ或^ハ減^シ退^シ

得れどもあれに由てても亦甲の増減に應して盈
縮せしえてこの關係を失ハ^シ去^ムるを得^シ耶
り^シ質^ヒ密^度の最高度を甲に隨て疎密^シめ^シ可
知^ル

是故に此二件の事情を以て必^シも分別をほを要

混淆すと耶

左廻し

二十一章 某度に翕張せば水蒸をして初めよりも
二倍の大^シ地に充^シせしめ其熱度をしてあれに
由て變化をは^シと狀可^ハ也もれハ某翕張初に比
あれハ其半を減^シをゆれば至^シあれを細釋^シれハ水蒸

を某空隙の地に流れ滿じ志免方一寸の地を十四
下て推體する者と同一重^サ那^シ志免^シを謂多然^シ
多然ハ同一水蒸二倍の大^サの空隙内ニ放ち流れ是
地にハ唯五升^リ皆體を行多那^シ故に水蒸^リ翕張^ス
ハ水蒸^リ容る^シ空隙の大小に應して相反對^スをは
道理あるを知るに至る

此くの如く水蒸^リ數箇^スの空隙に充斥^{セミ}する者
出れを水蒸^リの開大力^{ライテナント}又^シエキスパン^シ
シイヘカラクト^シ名づく下文に举^ス模盤^スに在て
一水蒸^リ何^シ開大を^シ起し來^スや其情状下に詳載

せすと次

二十二章 又水蒸^リに別種の定律あふ^シ實驗せり^今
量^リの水蒸^リ熟性^スを変^シ而^{シカ}して其翕張^ハ故^シ如多
少^シて變せ^シハ志む^シと^シハ其體容^{ノン}比^シ増大^ス
ハ其熟性^ス增進^シ比例^スモ^シ那^シ出れを細釋^シれ
ハ其熟性一度^スを增加^シ布^シは^シに體容^スを^シ増大^ス
あるを云多

二十一章及び二十二章に举た^シ性情^ハ獨^シ水蒸^リ其
水源^ト脈絡^ス断絶^シは時に方て出れを見^シく^シかの
み而て其性情^ハ蒙氣輪^ス大氣^ニ實驗^シする所^の情性

を相符合を水蒸の性情ハマリテ人皆定律と云
ひ大気皆性情ハガイリサック人の定律と云多
二十三章 星々以上メ迄も所にて明白耶るお
そく初免て水蒸を試験せしハヤーメスラト人の
功業にて学者今に於て其賜を承く他免免て水蒸
内に潜結せる煖氣ヒルムを表明して其幽微の理を
闡明せり蓋他謂く水を密封せる器に入れられ
を煮て滾沸の度ヒリモ二三度高から志免器内傍に
小孔を造り一二セコンド皆間に器内皆水蒸を此
孔より出ハ他器に移徙せ志免ハ其水再び百度

ぬ煖に回は此水蒸を別器に受けて打涼されハ唯
二三滴皆水珠を生じるのみにて水蒸の形を保ち
至大量皆温熱を存せしめり上にらゝる如た法にて
更に再出されを冷水を納たは桶中に轉し徙る志免
冷水滾沸を以て至るを待ちて其水を秤るに其秤
量ハ必ハ其六分の一を増加し此に由て知る
一升皆水ハ出ハれを化して水蒸皆状アラフあむに
必ハ五升皆水を煖免て滚度に至る志免に是れ至
別語にて出ハれを解されハ其滚湯の容ヒリメ五倍の
水を零度より升して百度に至る志免に足れる

を云多是経験に由て他謂ふく水蒸の潜結緩気ハ
必五百倍^{アリ}減せす。出と疑ひ邪し但し其後他及
餘人の反復経験せる所に据りて其数五百五十倍
と為せりと云多

此故に水蒸内に含免体温緩の全量ハ五百五十に一百を
加多る者に志て六百五十と因し数とを此温緩點

全量ハ熱性^{ヒヤク}ハ增加多^{シテ}海間に在ても故常を守りて
増加多^{シテ}海^{シテ}其數^ハハ數回試験して其必然を知る
所^シ如く其數^ハ皆六百五十より驗温器^{ヒヤク}度上升
し觸覺の緩氣^{即游離の緩氣}增加多^{シテ}其^ハ其潜

其質結^{シテ}緩^ハ却て銷減^{シテ}冰に至る但し其減銷^{シテ}冰^ハ
緻密^{シテ}其質增大^{シテ}冰にて知る^シ是を以て水蒸内
に含免体温緩氣^ハ全量を道出^{シテ}にハ必^シう^シ六百五
十^ノ數^を用^ム

自注此事ハ唯水と水蒸と脛絡相接^{シテ}者に就て言^フカ^ナシ
若し十分強固^{シテ}冰槽中^ニ水^を納^メて緩^タ免^ス水上
に蒸^ムを^シ蒸^ムを^シ蒸^ムを^シして次第に其熱性^{ヒヤク}を增加^シ
志むれハ潛結^{シテ}緩^ハ元次第に減殺^{シテ}に即^シ潜結^シ
緩^ハ六百五十の數^に至^ルハ復^シ取^シ所^シ其餘の
賊^{セシム}を^シ緩^氣ハ驗温器^{ヒヤク}にて驗知^{シテ}幾何緩^氣
を增加^シを^シ知^ル一此時水蒸の稠^{シテ}ハ水の稠^{シテ}と

相比均おれ水蒸状より化して水蒸と非はにハ
新分量の温煖ヒート用カむもシを要リて更に其極微
を外ア開ルを須ハされハ那タ是故に水ハ猶常に
槽内に存リれマ既に全く水蒸に化せんトも承
者より故に流体の水と水蒸と復相接し脉絡相連
あと船く上に云ヘる所の事此際に至てハア通
ちムあト通ス

二十四章 水蒸と水と脉絡相接して數種の度に翕
張志た海者ハ毎に其温煖再ハ其翕張ヒ生スニ分量相同シ可故に某分
量の水を意シ如く那タ翕張にて蒸羨せ志シ人ト

あるにハ毎必ムを同量の温煖を賤シせルハクす
うに別語にてあれを釋スれハあれのを免ムに同一
鍋鍋内に内き因ム同一分量の薪炭ヒンタウを焚くに非スれハ
得スるを云フ多同一鍋に内れ同一分量の薪炭ヒンタウを須
多ハの一事ハ實に叢明に本ハて定免得スる所那タ
今ハ人忍ムくハ問シあトあト人トの定免スりたは
翕張の水蒸ヒツヤウを生スし来ムにハ如何シして做得スつを乞
此一事を明解スるにハ一罐子カニに水を盈スて其
半に至り上際アツジに一萬七千箇カニ一キドイム六百
箇空隙カニを留ムると定免ス此罐子カニを善く保續スく

如火上に放頓もよしに於て十ド|イム^ミ水を蒸^ミ
て水蒸と那^シ志免^{即ち}百度^ミ水蒸に化せ志むれハ水
上の全室隙盡く水蒸を填満を何^シト那^シハ^{此時}水蒸の
全容ハ水の原容に比^シタレハ一千七百倍と那^シ可
故^シリ此時に方てハ水蒸の翕張^{ハ涅}ド|イム^ミ大^地
涅の一^メ又零三の力^ハて體定^スモ那^シ今ハ罐
子上に一孔を造^シ輕くして舉り易^シ舌を以て其
孔を塞^ム却^シ外際^ミハ唯濛氣のみに體^ス志む
多^シモハ其水蒸自一^メ零三の度^ミリも高く翕張^ス
を^シあ^シ能^ハ也^シ火を熾^シに那^シも依燃^シヒテ故の

あとし何^シ志免^シハ其度若^シ升る出^シあ^シハ其舌
即ち舉^シ杠^シセ^シヨ^シを以て那^シおれに反志其舌を
重く押^シて壁^ハ涅の三^メ又一の重^ナにて涅六面
方寸^ミの地を墜重^シする時^ハ涅を以て濛氣輪大氣^ミ
墜重^シ上に在^リ罐子内に一百度^ミの水蒸即ち一^メ
零三^ミの翕張^シは者も其舌塞^シて許多分量^ミ水蒸
をして鬱留^シして出去^シ志免^シを若^シ二十ド|イム^ミ
水を化^シして水蒸と那^シ勢^ハ其蒸氣^シ也^シ因^シく一千
七百信^{六百方寸}の室隙^ミを占め其奇容^{スペシヒ}一^シ此時八百
五十ド|イム^ミと那^シ是^シを以て第一表第二表^{卷末に見ゆ}

に在てハ其水蒸ニ又一ノ翕張にして其熱性一百二十二度又五分より此翕張ハ猶三ノ又一の重シテ舌を杠くはあヒ能ハモ其水蒸の翕張四ノ又一ハト取リ舌上之墜重三ノ又一に濛氣を加エト等志をに至ルハ其熱性の增加微少取リトモ每增加の際必シ舌を杠上シ今ハ出れドリ以上の墜重力を生し末はあヒ能ハムシテ

之の筆力有無
文法其古す
之の筆力有無
文法其古す

